

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520772

研究課題名(和文)大学初年次における英語リメディアル教育のあり方：習熟度と学習動機からの考察

研究課題名(英文)Some suggestion for a better remedial English classes: L2 reading proficiency and motivation

研究代表者

田中 貴子(Tanaka, Takako)

同志社大学・文学部・准教授

研究者番号：50434676

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は英語の習熟度、特に英語のReading力と英語を学ぶモチベーションや英語でのReadingのモチベーションの関係性を量的に探るとともに、低学力者層の英語を学ぶモチベーションのパターンを質的に調査し、リメディアル教育の在り方を考察した。その結果、「わからない」「わかる」という経験を積むことの重要性、努力が目に見える形(成績や人からの褒め言葉など)で報われること、自分の学習について見つめなおす機会およびアドバイスを与えること、そしてポジティブな自己概念の形成に繋がるようなサポート体制が必要であるとわかった。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to offer suggestions as to how remedial education programs in English might be made more beneficial for Japanese university students with low L2 (English) reading proficiency and relatively poor motivation. My research 1) explored the relationship between English reading proficiency and the motivation to learn and read English quantitatively, and 2) investigated motivational patterns of low L2 reading proficiency qualitatively. I found that considerable importance attaches to: a) a learner's having garnered positive experience in his or her studies; b) a feeling of personal efficacy; c) support and guidance of students as they reflect on their own learning; and d) assistance given to students such that they develop a more robust concept of self.

研究分野：英語教育学

キーワード：英語教育 学習意欲 リメディアル教育 混合研究法 質的研究

1. 研究開始当初の背景

国際化にともない、英文学科など英語という言語を学問研究の媒介とする学科のみならず、英語力育成の重要性は言うまでもない。大学生の学力低下は日本の教育における深刻な問題としてとらえられているが、英語における学力低下も例外ではない。独立行政法人・メディア教育開発センター(2006)の英語力調査によると、同年新生の6割が中学生レベルの英語力にとどまっている。このような状況への対応として、習熟度クラスや基礎学力の不足する学生たちをサポートする目的でリメディアル教育を導入する大学が増えており、その取り組みや成果を報告する実践論文も多くみられるが、モチベーションを関連付けている研究は希少である。例えば、過去の関連学会の英語教育に関する発表を概観すると、教授法、e-learningの活用、及びオンライン教材の実践と効果など、スキル面からの学習支援が大半を占めているが、学習意欲を考察したものは皆無である。しかしながら、現代の教育問題及び国際語としての英語の位置づけを考慮し、学習意欲の観点も取り入れた研究は重要であると考えられる。

2. 研究の目的

英語の習熟度、特に英語の Reading 力と英語を学ぶモチベーションや英語での Reading に対するモチベーションの関係性を量的に探るとともに、低学力者層のモチベーションの種類やパターンを質的に調査し、学力面と意欲面の向上のため、その両側面に配慮したリメディアル教育の在り方を考察することを目的とする。

3. 研究の方法

[Stage #1: 量的研究]

研究参加者: 大学1年生 218名。一年以上の海外留学および滞在経験なし。

研究データ:

- TOEFL-ITP のスコア
- 4 セクションからなるアンケート
 - 1) 読書環境や経験について 2) 英語を学ぶオリエンテーション, 3) 日本語で読むことに対するモチベーション 4) 英語で読むことに対するモチベーションのセクションから構成。

アンケートの1)、3) & 4)のセクションについては、Wigfield and Guthrie (1997)の The Motivation for Reading Questionnaire (MRQ): Original and Revised Versions, Revised version of MRQ (Wang & Guthrie, 2004), Mori (1999)及び Kim (2010)で用いられたアンケートを参考に作成した。第二セクションの英語を学ぶモチベーションに関しては、Deci と Ryan (1995)の自己決定理論を理論的枠組みとしている。

分析方法:

英語のリーディング力の習熟度 (TOEFL Reading section)と各セクションの関係性を探るべく、因子分析を行った。

[Stage #2: 質的研究]

研究参加者:

Stage #1の結果をもとに Stage #2の参加対象者となる人々(低 motivation, 低 L2 reading 力)に募集し、協力を申し出てくれ

た3名。英語専攻の大学1年生の女子 Hina, Maki, Yuka (すべて仮名)。

データ収集：1年生の秋学期終了後、2～3月の間に参加者の都合のいい時期に合わせて実施。

データ収集手順:

インタビュー前に Pre-interview profile questionnaire に記入してもらい、それをもとにインタビューを行った。Pre-interview profile questionnaire には英語の習熟度(英語の資格試験のスコアなど)、短期海外留学経験の有無、自身が考える英語を学ぶモチベーションの高さについて、これまでの英語学習とモチベーションの変化とその原因について、などが含まれる。

インタビューは日本語を用い、これまでの英語学習経験や大学入学後、そしてインタビュー時の英語学習やモチベーションについて中心に、Pre-interview profile questionnaire に基づいて話してもらった。

分析方法:すべてのデータを書き起こし、そこから浮かび上がってくるテーマやパターン、そしてそれぞれの influential factors を探っていった。彼らの motivation の種類やパターンを質的に調査し、これまでの学習経験、そして on-going な英語学習(特に reading 関係)プロセスにおける motivation の変化及びその要因に注目をし、どういふことが motivation を支える上で必要なのかを考察した。

4. 研究成果

[Stage #1]

記述統計後、因子分析を行った結果、各セクションから下記の因子が見つかった。

読書経験や環境 (Section 1) : 3つの要因

(読書活動を支える親の行動、家庭環境、現在の読書に関わる習慣)

英語を学ぶモチベーション (Section 2): Identified/integrated regulation, intrinsic motivation, amotivation, external regulation

日本語で読むモチベーション (Section 3): Interest/pleasure, Reading curiosity, importance of reading, Reading challenge, positive attitude toward L1 reading, negative attitude toward L1 reading, L1 Reading for grades

英語で読むモチベーション (Section 4): positive attitude toward L2 reading, L2 reading challenge, Amotivation in L2 reading, Importance of L2 reading for personal growth, Importance of L2 reading for the global world, negative attitude toward L2 reading, L2 reading for grades, L2 reading involvement

そして、TOEFL-ITP の Reading セクションのスコアと相関があった要因は以下の通りである。

英語を学ぶモチベーション (Section 2): amotivation ($r = -.280, p < .001$)

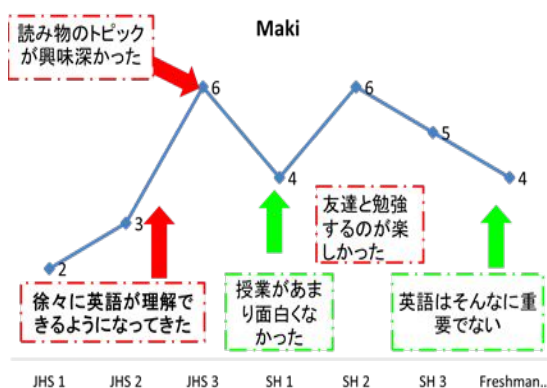
日本語で読むモチベーション (Section 3): Interest/pleasure ($r = .150, p < .05$), Importance of L1 reading ($r = .248, p < .001$)

英語で読むモチベーション (Section 4): L2 reading challenge ($r = .333, p < .001$), Amotivation in L2 reading ($r = -.244, p < .001$), negative attitude toward L2 reading ($r = -.291, p < .001$), L2 reading for grades ($r = -.171, p < .05$), L2 reading involvement ($r = .172, p < .05$)

[Stage #2]

Pre-interview questionnaire とインタビューデータをもとに各参加者の英語学習経験におけるモチベーションの変化とそれに関連する要因の概要を下記のようにまとめた。

<Mina's case>



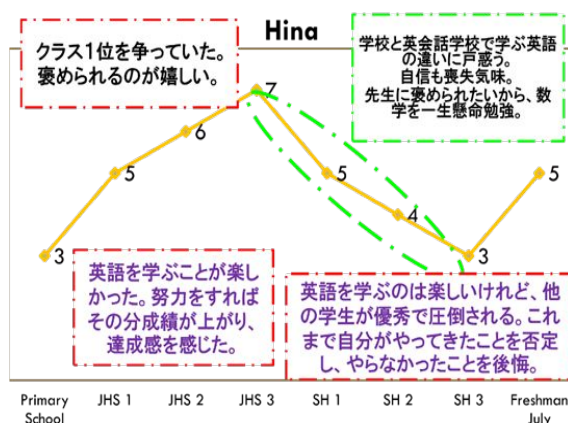
学び始めた中一は、全く英語が理解できず、その状態が中二まで続き塾に通い始めた。そこから少し文法がわかるようになってきて少しモチベーションが上がってきた。中三の授業内で扱うトピックが難しいが面白く感じてきた。しかし、高校になると内容が簡単になり、油断してあまり勉強しなくなったが、二年生になり熱心な友達グループでゲーム感覚で勉強をし、それが三年生になっても続いた。

Maki のモチベーションの変化を支えるものは、理解できるということ、達成感、そして、意欲的な友達の存在であった。

英語は好きな科目の一つではあるが、特別に思い入れのある科目ということでもない。テスト勉強のように短期集中型の勉強の仕方で達成感を感じるのが好きだという。それは中学時代から現在へ至るまで変わらず、

大学においても単位を落とさないように、ということが目標となっている。また、英語を大学における専攻に選んだ理由は、勉強すれば点数がとれる科目であること（一番好きな科目は他にある）そしてグローバル化する社会に対応するため英語くらいはやっておくことが必要だと思ったからだが、将来的に英語を活用して仕事がしたいという気持ちは特にないという。

<Hina's case>

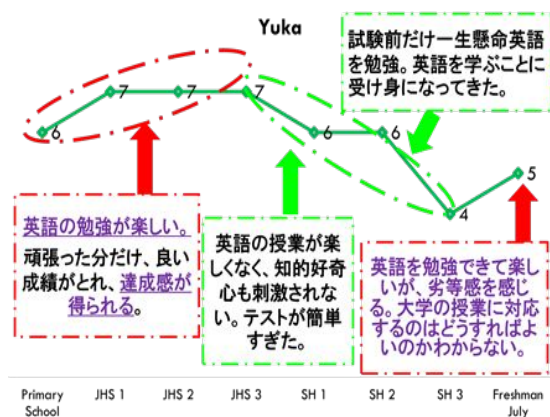


Hina にとっての英語は、コミュニケーションのための道具ではなく、自分にとって特別なものを探していくうえで、そうなる可能性のある一つであった。

何か人に負けないことが一つほしい 英語ができる自分、というものが自分を支えてくれる原動力となっていた。科目としての英語 文法を問われる だから塾へ行き、学校の成績でよい点を取り、皆から英語に関しては一目置かれる存在となる。

つまり、単にいい成績がほしい、ということではなく、テストの結果は自分の努力を反映してくれ、自信に繋がる、という何か人より優れているものを見つけないという Hina のアイデンティティに関わっている。

<Yuka's case>



小学生の時から英語に少しずつ興味を持ち始め、英語を話せるようになりたいと強く感じ、英語を流ちょうに話す人に対する憧れをもっていた。中一から英語の授業は楽しく、話せるようになりたい、という気持ちを強く持ち積極的に学んできた。成績も常によく、やればやっただけ結果がついてくるのも嬉しかった。高校生になってもその気持ちは変わらず、英語は好きで英語を話せるようになりたい、という気持ちを持ち続けていた。ただし、高校三年生になると受験優先で少し英語が楽しくなくなり最も低いモチベーションであった。この時は、テスト（推薦入試のため決められた基準以上の成績が必要）のためにやっていた。大学入学後もその気持ちに大きな変化はないが、周囲とのレベル差を感じ、高校時代のテストのための暗記中心の勉強法に対する後悔の念を強くしていたものの、どう状況を打開すればよいのかわからず途方に暮れていた。

このように3名がそれぞれ異なる理由で英語を学んでいるが、まず英語及び英語で読むことに対するモチベーションを高め、また維持していくためには、学ぶことが楽し

いと感じたり、努力が成績に繋がったり、人から褒められるという外的な視点からの手ごたえが必要である。この点から、「わからない」または「できない」「わかる」という経験を積み重ねられるような環境を作っていく必要がある。

また、この3名ともいわゆる一般入試を経験していない。そのことから、劣等感を感じたり、英語力の高いクラスメートたちに圧倒されたり、授業内での発言に対する不安を感じたり、高校時代の勉強量に対して後悔の念を感じたりしていた。この点、学生たちのなかにあるステレオタイプ化されたイメージ（例えば、特定の入試を経て入学したものは劣っている）が必ずしも正しいといえないことを理解させ、ポジティブな自己概念像を形成する必要がある。また、HinaとYukaのように状況をどうにか変えたいと思いつつも、何をどうしてよいのか、わからずにいる学生たちに対しては、学習相談が必要である。普段の学習習慣や方法について見つめなおすよう促し、適切なアドバイスが必要である。

学力 and/or モチベーションが低い学習者にもそれぞれ理由があり、さまざまな学習者のバラエティが存在するというのを再認識し、ひとりひとりにとって有意義な学びの時間となるようサポートを考えていく必要がある。

今回の研究では、当初予定していた長期にわたり低学力、低モチベーションの学生(たち)が変化していくのかを見ることができ

なかった。それは、参加に興味を示した学生たちもいたが、大学の勉強や生活で手いっぱいだったため、協力を得られなかったためである。将来的には研究参加がこの層の学生たちにとって負担ではなくプラスになるような形で研究を考える必要がある。また、本研究期間内に収集した多くの量的・質的データはさらに分析を加えていき、学会発表や論文という形で報告を続けていく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

Tanaka, T. (2013). Listening to less-motivated learners: A qualitative study. Presented at BAAL Learning and Teaching Special Interest Group 9th Annual Conference. July 5th, 2013. St. Mary's University College, Twickenham, England.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 貴子 (TANAKA, Takako)

同志社大学文学部 准教授

研究者番号：50434676

(2)研究分担者

赤松 信彦 (AKAMATSU, Nobuhiko)

同志社大学文学部 教授

研究者番号：30281736